

## 母音・子音の概念と五十音図

内田智子(名古屋大学大学院博士課程後期)

### 要旨

明治期の日本語文典には、五十音図に基づいた音の説明が見られる。本稿ではその中に現れる「母音」「子音」「父音」などの用語とその概念の背景を考察し、近世期における音声分析の実態を示した。伝統的音韻学では「ア行音＝母」とされる。これは悉曇学で母音字を意味する単語 *matr.ka, mata* (母の意) に由来する。悉曇学の哲学的認識と漢語音韻学の「韻」概念が融合し、近世期のア行音の記述が完成した。国学派の一派である音義派は、漢語音韻学の反切の理論を音図に適用して仮名反切を行い、音図の力行以下45音を分析した。これにより力行以下45音が2音の結合であるという認識が示される。本来反切上字は子音を表示するが、仮名文字による反切では純粋な子音概念に到達できない。洋学者たちは、音素文字の獲得によって現代の子音の概念を理解した。現在使用される「子音」の語は彼らによる造語である。

### 1. はじめに

西洋言語学輸入以前、明治初期から中期にかけての日本語文典では、日本語音に対して様々な分析方法が試みられている。それらは五十音図を使用する点において共通し、その説明法には、大きく分けて以下の3種がある。

- ① 五十音図上の音を「ア行音」と「力行以下45音」に2分類する立場。(ア行音を「母音」、力行以下45音を「子音」とする場合が多い)
  - ② 五十音図上の音を「ア行音」「ウ段音」「その他の音」に3分類し、「ウ段音＋ア行音＝その他の音」とする立場。(ア行音を「母音」、ウ段音を「父音」、その他の音を「子音」とする場合が多い)
  - ③ 五十音図上の音を「ア行音」と「力行以下45音」に2分類し、さらに「音図上に現れない音」を想定する立場。「音図上に現れない音＋ア行音＝力行以下45音」とする。(ア行音を「母音」、音図上に現れない音を「子音」とする場合が多い)
- ①②③は「ア行音」を他行から区別する点で共通するが、力行以下45音の捉え方は様々である。術語の面でも、①②③はすべて「ア行音＝母音」とするが、「子音」はそれぞれ指示対象が異なる。また、「母音」は「母韻」「ははのこゑ」、「父音」は「ちちのこゑ」、「子音」は「子韻」「このこゑ」とも書かれ、③の「子音」が「発声」「父音」と記されることもある。本稿では、明治期の文典に現れるこれらの術語と音声記述の背景を考察し、近世期における音声分析の実態を明らかにしたい。

### 2. 明治期文典の記述

明治期の文典類において、上記①②③がどのように記述されているかを以下に示す。

①の立場をとるものに、古川正男『絵入智慧の環』(1870/明治3)、田中義廉『小学日本文典』(1874/明治7)がある。ア行音を「母韻」、力行以下の45音を「子韻」とし、ア行音を音の根本に据える。中根淑『日本文典』(1876/明治9)も同様の立場をとる。

母韻とは アイウエオ の いつゝの 音 なり。子韻とは のこり 四十五音のことなり。みぎの いつゝの こゑより。のこり 四十五音は うまるゝものにて。いつゝの こゑは 母のごとく。四十五おんは子のごとし。これより 母韻 子韻 てふなはいで きぬる なり。 (『絵入智慧の環』)  
 此五十音のうち、アイウエオの五字を、母韻と云ひ。其他の四十五字を、子韻と云ふ。母韻は、音の本にして、何れの音も、長く引きて呼べば、必ず此五母韻に、帰するものなり。假令ばア緯の音を、長く引きて呼べば、皆アの音に帰し。イ緯の音は、イの音に帰するを以て知るべし。子韻は、各自分の音あれども、其音を長く引くときは、悉く母韻に帰せざるは無し。此故に、アイウエオの五字を、母韻といひ。其他の四十五字を、子韻といふなり。 (『小学日本文典』)

②の立場をとるものには西周『ことばのいしずゑ』(1870/明治3以前)、堀秀成『音図大全解』(成立年未詳。明治初期か)がある。「ウ段音=父」と「ア行音=母」の2音の結合によって「子」の音が生まれるという点に特徴がある。

アイウエオの いつゝを はゝのこゑと いひ、また よこさまに まなかの きぎをつたひ クスツヌフムユルウの こゝのつを ちゝのこゑと いふ、この ちゝのこゑを さきに はゝのこゑを あとに して、すみやかに あはせ よぶときは、しじふごゝの このこゑを うむなり、たとへば クアの つゝめは カ、クイのつゝめは キ、クオは コ、クエは ケ、クウは クと なるが ごとし

(『ことばのいしずゑ』)

子音とは父母二音より分生したる音を云 父音は久須都奴不牟由流宇の一段の音を云ひ母音は阿伊宥衣於の一行の音を云 此父母の音配偶して三十六音を分生する也 其分生を試るには例へば久の音を首に於の音を尾に久於二音を切迫に呼ぶ時はコの音を生じ須於を切迫に呼ぶ時は曾の音を生ずるが如し (『音図大全解』)

③は、カ行以下45音を、「文字に現れない音+ア行音」とする立場である。この立場をとるものには、大槻文彦『広日本文典』(1897/明治30)、物集高見「日本小文典」(『ことばのはやし』所収文典 1898/明治31)がある。

加行以下、九行ノ諸音ハ、其行毎ニ、其行中ノ五音ヲ呼ビ起ス一種ノ声アリ、コレヲ発声ト名ヅク。発声ハ、未ダ音ト成ラズ、単純音<sup>2</sup>、其韻トナリテ、相熟シテ、始メテ音ト成ル。此ノ故ニ、加行以下ノ九行四十五音ヲ成熟音ト名ヅク。 (『広日本文典』)

あいうえおの五字は、母韻にて、他の四十五字は、子母韻、または、二母韻の配合<sup>3</sup>なり。(中略)学理の上にては、音尾の、母韻を除きて、あとに余るをもて、子韻、または、他の、母韻なりといはるゝなり。 (『日本小文典』)

<sup>1</sup> 西周の記述は②と③の境界線上に位置する。引用最後の「クウは ク」には以下の注記が見られる。「みぎの うちにて クウのつゝめは ク、スウは ス、ツウは ツ、ヌウは ヌ、フウは フと いはば、うひまなびの ともからへ すこし きこへがたかるべし、こは ちゝのこゑの クスツヌなどは まさしく クスツヌとまて いひきらぬ ところに、その こゑ ありと、しるへし」。ウ段音+ア段音により音が生成するという点で、本稿では②に分類した。

<sup>2</sup> ア行音を指す。「阿行ノ五音ハ、ロヲ開キテ声ヲ発スレバ、単純ニ出ヅ、因テ、コレヲ単純音ト名ヅク」(『広日本文典』第21節)

<sup>3</sup> 物集はヤ行音・ワ行音を「ア行音+ア行音」とする。

①②③は、ア行音を特化する点において共通し、多くはそれに「母」の文字を当てている。次節では、これらの背景となった近世期のア行音の捉え方を考察する。

### 3. 「母音」の用語とその概念

#### 3.1. 「母音」という用語

①②③の多くはア行音を「母音<sup>4</sup>」とするが、「母音」という用語は何に由来するのか。イギリス人であるチェンバレンの『日本小文典』（1897/明治30）に「羅馬字を以て綴る時は、日本語に母音五つあり、即 a i u e o これなり」とあり、大槻文彦『広日本文典』（1897/明治30）に「単純音、母韻、共ニ、英語ニイフ Vowel ナリ」とあり、ヘボン『和英語林集成』（1867/慶応3初版）には、初版から Vowel の項に boin の訳語が見られる。これらより、幕末には既に Boin の語が使用されていたこと、明治期において「母音」の語は英語 Vowel に対応する語という認識があることが分かる。英語 Vowel との対応は、西洋音声学輸入以降、あるいは洋学に由来する可能性を想像させる。高野繁男（1980）でも、「母音」は洋学導入後の「新造語」（辞典にあり典拠の示されていない語。または洋学書および明治以後の文献の用例が見られるもの）に分類される。

しかし、英語の Vowel は「音」「響き」の意味である<sup>5</sup>。洋学の概念であれば、その訳語も英語 Vowel の意味を反映したものとなるはずだが、「母音」の「母」の文字との対応関係は見られない。英語の訳語として以前に「母音」の語は存在したのだろうか。筆者の調査によれば、平田篤胤『古史本辞経』（嘉永3/1850刊）の「アイウエオ等の下に各々唯韻非声と記せるは。此はたゞ母韻の字にて」という表現が初出である。日本の伝統的音韻学を継承する国学派の人物によって「母韻」の語が使用されていることは注目し得る。

#### 3.2. 「ア行音＝母」の認識

「母音」という用語そのものこそ見られないものの、近世期において五十音図中の「ア行音」は「母」の文字と密接に結びついている。（下線は筆者による。以下同じ）

古来、「アイウエオ」ノ五音ヲ、字母ト称ス、今日ヲカヘテ、音母ト云フ、実ニ音ノ母ニシテ、何レノ音モ、此ノ「ア」行ノ音ヨリ出デザル者無ク、且何レノ音モ、此ノ「ア」行ノ音ヲ含マザル者無シ

（鳥海忝『音韻啓蒙』1816）

阿行は声を引とも他へ移る事なし、加行より下の音は、声を引に皆阿行の本音へかへり、故に阿行を母とし、他を皆子とすることわり

（賀茂真淵『語意考』1769）

阿伊宇衣於の五音は音母にて。其余の四十余の音そのこゑを引ときは。皆此音母の五音に帰する也。

（村田春海『五十音弁誤』1793）

この「ア行＝母」という認識は、悉曇学の影響を受けたものと思われる。契沖『和字正濫鈔』（1695/元禄8）には次の記述がある。

其字母四十七字あり。初に十二字あり。摩多の字といふ。摩多、此には母と翻す。又

点画とも韻ともいふといへり。和語のために其要を取れば、あいうえをの五字なり。

悉曇学では、母音字のことを「摩多」という。サンスクリット matr.ka, mata の音写で、「母」

<sup>4</sup> 「母音」と「母韻」はここでは区別しない。

<sup>5</sup> 英学以前には蘭学が主流だったが、オランダ語 Vocaalen, Klinker も「音」の意味であり、「母」の意味とは対応しない。

の意である。悉曇学において「摩多」は「母」であり、日本語ではア行音に該当するのである。ここから、悉曇学で成立した「ア行音＝母」の認識が、蘭学や英学の学習を通じて、オランダ語の *Vocaaalen*、英語の *Vowel* に対応する概念として認識されるようになったと考えられる。

### 3.3. 悉曇学における「ア行音＝母」の認識

「ア行音＝母」という認識は、以上のように悉曇学の用語に由来すると思われるが、なぜア行音が「母」なのか。悉曇学では、「母」の文字は「子を生む」ことを意味し、全ての音は「ア」音が転じたものとされる。「ア」が転じて「イ」となり、「ウ」となる。また、「ア」が転じて「カ」となり、「カ」から「キクケコ」が生まれる。悉曇学では「ア」を音の本源とするとともに、ア行の五音が重要視される。特別視されたア行音は、他の音を「生む」という意味で「母」なのである。(割注は【 】で示す)

一切ノ音声ハ五十字ニ過キス【アイウエオ等】五十字ノ音ハ尽ク十四音ニ撰ス【アイウエヲノ五ハ韻也。カサタナハマヤラフノ九ハ声也 合シテ十四ト為】十四音ハ五韻ニ収マル  
(浄嚴『悉曇三密鈔』1682)

仏法には。父母といへども母を先とす。正文<sup>6</sup>より先に摩多ありて。摩多の功によりてきくけこ等の音生ずる。此理なり。  
(契沖『和字正濫鈔』1695)

しかし、前掲の鳥海忝、賀茂真淵、村田春海の記述は、「加行より下の音は、声を引に皆阿行の本音へかへれり」(賀茂真淵『語意考』)のように、「韻」となることを「母」である理由とする。契沖『和字正濫鈔』では「摩多」を「点画とも韻ともいふといへり」と述べた後に、以下の記述がある。

梵文の法は。摩多の字を省して体文の字に加ふ。省するやう漢字の三水等のごとし。迦に伊を加ふれば枳となり。宇を加ふれば俱となり。曳を加ふれば計となり。遠を加ふれば。古となる。迦伊反枳。迦宇反俱。迦曳反計。迦遠反古なり。枳を引けば伊となり。俱を引けば宇となり。計を引けば曳となり。古を引けば遠となりて。韻皆摩多の声に帰る故。点画すなはち韻なり。

契沖においてア行音は「母」であり「韻」である。梵字は「子音＋ア」を表す体文と、摩多の一部を表す母音字との結合によって成る音節文字である。よって全ての文字には必ず摩多が含まれる。「母＝摩多」が「他の音を生む」という哲学的認識と、「全ての音(梵字)は摩多を含む」という事実により、全ての音は「引けば」「摩多」に「帰る」という記述が成立したと思われる。前掲の「声を引に皆阿行の本音へかへれり」(『語意考』)、「そのこゑを引ときは。皆此音母の五音に帰する」(『五十音弁誤』)などの表現にも、ア行音を本源とする思想が見られる。だが、悉曇学の転生説にも梵字の生成理論にも「音を引く／韻」という認識は存在しない。契沖の記述は、反切の用例が示すように、悉曇学と漢語音韻学との融合である。以下、漢語音韻学に見られる「母」の文字の使用と「韻」の概念について考察する。

<sup>6</sup> 正文は「子音＋ア」を表示する文字である。すなわち音図上の「カサタナハマヤラフ」を指す。ここでは、正文を「父」、摩多を「母」とする。

### 3.4. 漢語音韻学における「母」と「韻」

近世期の日本において、韻鏡研究に代表される漢語音韻学<sup>7</sup>では、日本語のア行音を「母」としない。「文字の母」「音の母」という意味で「字母」と命名されるのは、現代の子音にあたる文字群である。漢語音韻学では母音よりも子音が重視され、それを示す 36 文字を「字母」とする。

字母トハ子ヲ生ズルノ義也。先ヅ其音正シキ文字。一字ヲ定メテ衆字ノ總統トシ。是ヲ準トシテ。ソレニ属セル数千ノ文字ヲ生出セバ。人ノ母タルモノ、衆子ヲ生ズルニタトヘテ字母ト云フ也。字母ヲ定メテ三十六音ノ總統ト為セリ。天下三十六音ニ帰属セザルハ無シ。字母ハ字音ノ母ナリ。実ハ音母ト称スベキヲ。其音ヲ備ヘタル字ニ寄テ字母ト称シ来レリ。只其音ヲ要トシテ。韻ニ拘ハラザル故ニ三十六ノ中ニ四声ヲ雜ヘテ三十六母各四声ニ通スルコトヲ知ラシメタルナリ。凡文字ノ音ヲ律正セント欲セバ。其總統タル所ノ三十六母ノ音ヲ正シクスベシ。字母ノ音正シカラザレバ。数万ノ字音正シカラズ。故ニ先字母ノ音ヲ正シクシテ後ニ韻鏡四十三転ニ配列セル所ノ字子及天下数万ノ字子ノ音某某ノ韻母ノ韻ニ協ヘテ正スベシ。

(無相文雄原考『韻学階梯』1834)

「母」は「子を生む」ものであるという点で、悉曇学の思想と共通するが、漢語音韻学では「字母」は子音を指す。子音にあたる文字を「字母」とするのに対し、母音にあたる文字が「韻母」であることから、母音はあくまで「韻」としての役割であり、子音に主眼が置かれていることが分かる。

契沖などに見られる「韻」という概念は漢語音韻学に由来する。漢語音韻学において単独母音字は特別視されず、『韻鏡』でも「喉音」の一種に分類される。母音概念の代わりに現れるのが「韻」である。中国では詩文作成のため、多くの韻書が制作されてきた。その中で漢字の発音を示すために「反切」という方法が考案される。「韻」は反切の母音部分を示す術語であり、日本語のア行音に対応するものとされる。

韻ハヒバキト訳ス 散緩迫促<sup>8</sup>ノニアリ (中略) 其散緩ノ韻ニアイウエオノ五アリ  
(泰山蔚『音韻断』1799)

韻母ノ余声ヲ論スルニ平上去ニアイウエランの六類アリ (文雄『韻鏡指要録』1773)

漢語音韻学において日本語のア行音は「母」ではないこと、日本語のア行音は「韻」に対応することを示した。よって、前掲の契沖や賀茂真淵などに見られる、近世中期のア行音の記述は、悉曇学の「ア行音＝母」と、漢語音韻学の「ア行音＝韻」が融合した結果であると思われる。

### 3.5. 悉曇学と漢語音韻学との融合

以上より、悉曇学では「ア行音＝母」であり、漢語音韻学では「ア行音＝韻」であることが明らかとなった。漢語音韻学は悉曇学の枠組みの中で研究が行われてきたが、ここで両者の融合が起きる。反切で使用される 2 文字のうち、日本の音韻学では、母音を表す方

<sup>7</sup> 以下、特に注記を施さない限り、「漢語音韻学」の語は、近世期の日本で行われた研究を指す。

<sup>8</sup> 「迫促」は「俗間ニハネル音ト云字ナリ」とあり、「ム」「ン」がこれに当たるとする。

の文字(下字)を「母字」と呼ぶ<sup>9</sup>。これは、悉曇学の影響と思われる。梵字は体文と摩多からなる音節文字であり、体文に摩多を加えて音節文字を作ることを「切継」という。「切継」は、子音字<sup>10</sup>+母音字により形成されるという点で漢語音韻学の「反切」の原理に准えられる。悉曇学の「切継」において母音を示す「摩多=母」が、漢語音韻学の「反切」に適用され、母音を示す反切下字が「母字」と命名され、普及したと考えられる。同様に、「切継」と「反切」との類似により、悉曇学の「ア行音=本音」と漢語音韻学の「ア行音=韻」の思想を融合させた結果、「加行より下の音は、声を引に皆阿行の本音へかへれり」(『語意考』)という記述が生まれたと推測される。

ここで、「母韻」という表記に注目する。明治期の文典類において、ア行音は「母韻」とも「母音」とも表記される。「韻とは 音と いふも おなじ やうなる こゝろと しるべし」(古川正男『絵入智慧の環』)とあることから、「母韻」と「母音」の区別はないように思われるが、大槻文彦『広日本文典別記』(1897/明治30)に次の記述が見られる。

母韻トハ、発声ノ韻トナリテ、音ヲ成サシムル本ナルガ故ノ称ナリ (第14節)

母韻ノ「母」ノ字ハ、必シモ女親ノ義ニアラズ、音ヲ成ス本ノ意ニテ、莊子ニ氣母トアルハ、元氣ノ本ノ意ニテ、又酒ヲ醸シ成ス材料ヲ、酒母トモイフガ如シ (第17節)

「母」が「音ヲ成ス本ノ意」であることから、「韻」は「発声ノ韻」となることに由来するようである。また、大槻『広日本文典』(1897/明治30)には次の記述がある。

阿行ノ五音ハ、口ヲ開キテ声ヲ発スレバ、単純ニ出ヅ、因テ、コレヲ単純音ト名ヅク (第21節)

単純音ハ、斯ク、発声ノ韻トモナレバ、母韻ノ称モアリ (第22節)

ア行音に「単純音」「母韻」の2種の用語を対応させる。「単純音、母韻、共ニ英語ニイフ Vowel ナリ」(『広日本文典』第29節)の記述から、両者はともに Vowel に対応する語と読み取れる。では、なぜア行音=Vowel に2種の術語を対応させるのか。

阿行ノ音ハ、噫、得、御ノ如ク、固ヨリ、単独ニモ発シ、一意義ヲモ成シテ、発声ノ韻トナルト、否ザルトニ関セザルコトアリ、サレバ、其音ノ本分ニ、別ニ、単純音ノ名ヲ付セリ (『広日本文典別記』第14節)

「母韻」は「韻」であることが条件なのである。落合直文「父音母韻論」(1903/明治36)には以下の記述がある。

母韻を、五十音中阿行の五音なりとして説明せるは、誤なり、母韻は、即ち音のヒゞキなり、一の音ありて、さて後に始めて、このヒゞキは生ずるものにして、唯ヒゞキのみ独立して生ずるか如きは、道理上、決してあるべき筈なきものなり。こゝに、カといふ音あらむ、そのヒゞキは、即ちアなり、この母韻なるアにあつべき符牒あらざ

<sup>9</sup> 子音を表す反切上字は「父字」という。文雄『翻切伐柯篇』(1773/安永2)に「韻鏡序ニ切母及婦納ト云者は是ナリ 諸家之ヲ謬解シテ母ハ反切ノ下ナル字ヲ指スト云ハ非ナリ 又切韻ノ二字ヲ父字母字ト称スルコト華人ハ多ク言ハサル所ナリ 故ニ或カ誤リテ父字母字ト称スルコトハ和人不稽ノ謬妄ナリトス 今按スルニ是モ亦不稽ナリ」とあり、中国での用例も紹介されているため、「父字」「母字」の語が日本独自のものとはいえないが、日本で一般化したのは、ア行音を「母」とする悉曇学の影響と推測される。

<sup>10</sup> 体文は「子音+ア」であるため、厳密には子音字ではない。

るがため、五十音中の文字を借り用ゐたるなれど、阿行のアとは、自ら区別あるものなり

大槻と落合はともに「母韻」に「韻」の要素を求め、単独で発音されるア行音とは異なることを示す。

梵字ニテハ、本書ノ単純音ヲ悉曇（成就ノ義）トイフ、十二字アリ、（長短、各五韻、並、空、涅槃）（中略）又、摩多トイフモノ、十二アリ、是レ、悉曇ノ半体ノ点画ニテ、体文ニ加フルトキノ用トス、即チ、本書ノ母韻ニ当ル

（『広日本文典別記』第16節）

大槻は「単純音」を「悉曇<sup>11</sup>」、「母韻」を「摩多」に対応させる。梵字の母音字には、単独で発音する時に使用する母音字と、切継で使用する「母音字の一部」の二種がある。「音は一種、文字は二種」という点に注目すれば、「ア行音」を特別視する悉曇学と、「韻」と「切継」との類似性を厳密に適用した結果が、大槻や落合の記述となったと思われる。

しかし、理論適用の厳密性に拘泥した結果、軋轢が生じたようである。大槻や落合は「単独母音音節」と「韻」との「音」としての差異に言及しない。明治中期以降の「韻」概念の消滅は、反切を重視する伝統的音韻学からの脱却を意味する。西洋音声学の Vowel の概念の輸入により、伝統的音韻学の問題点が露呈し、「韻」概念は忘却されることとなったのである。

以上より、明治期のア行音の捉え方には伝統的音韻学が大きく影響していることが明らかとなった。これを踏まえ、次節では「カ行以下45音」の捉え方について考えたい。

#### 4. 「子音」の用語とその概念

冒頭で示したように、①②③ではそれぞれ「子音」の用語が意味するものが異なる。①は「カ行以下45音」、②は「ア行音とウ段音以外の音」、③は「音図上に文字としては現れない音」である。

##### 4.1. ア行以外の音を「子音」とする立場

①は「ア行音＝母音／ア行音以外＝子音」であり、②は「ア行音＝母音／ウ段音＝父音／それ以外＝子音」である。①に「父音」の概念を加え、より詳細な説明を施したものが②であるように思われるが、①と②では音声分析のレベルが異なる。

①の捉え方は悉曇学の影響下にあると思われる。3.3で述べたように、悉曇学には「転生」という考え方があり、ア行音が他の音を「生む」。

前掲の古川正男『絵入智慧の環』の記述を見られたい。

母韻 とは アイウエオ の いつゝの 音 なり。子韻 とは のこり 四十五音 の こと なり。みぎの いつゝの こゑ より。のこり 四十五音は うまるゝもの にて。いつゝの こゑは 母 の ごとく。四十五おん は 子 の ごとし。

「母」と「子」の関係は、「母」が「子」を「生む」という意味においてである。これは悉曇学に見られる哲学的認識であり、科学的な音声分析は行われていない。田中義廉『小

<sup>11</sup> 大槻は単独母音字を「悉曇」、体文に加える「母音字の一部」を「摩多」とするが、一般的には両者ともに「摩多」と呼ぶ。

悉曇学に見られる哲学的認識であり、科学的な音声分析は行われていない。田中義廉『小学日本文典』の記述も挙げる。

子韻は、各自分の音あれども、其音を長く引くときは、悉く母韻に帰せざるは無し。

此故に、アイウエオの五字を、母韻といひ。其他の四十五字を、子韻といふなり。

「韻」という概念が示される点で、より分析的な記述である。前述のように、この記述は悉曇学と「韻」概念の融合による。近世の漢語音韻学において、「韻」の概念は反切と密接な関係を持つが、田中の記述に反切の意識は見られない。カ行以下 45 音に対し「韻」の存在を述べるのみであり、現代の子音に当たるものの存在は示唆されない。

これに対し②の捉え方は、「母」「父」「子」の 3 要素が提示される。以下は、前掲の堀秀成『音図大全解』の記述である。

子音とは父母二音より分生したる音を云 父音は久須都奴不牟由流宇の一段の音を云  
ひ母音は阿伊宥衣於の一行の音を云 此父母の音配偶して三十六音を分生する也  
ウ段音である「父音」、ア行音である「母音」が「配偶」したものが「子音」である。

分生を試るには例へば久の音を首に於の音を尾に久於二音を切迫に呼ぶ時はコ音を生じ須於二音を切迫に呼ぶ時は曾の音を生ずるが如し (『音図大全解』)

「ク(父音)」と「オ(母音)」より「コ(子音)」が生まれ、「ス(父音)」と「オ(母音)」より「ソ(子音)」が生まれる。

ちゝのこゑは たてに とほり、はゝのこゑは よこに ぬきて その くらい た  
がふ こと なし、たとへば ロは ラの くだりの ルを ちゝと し、オを  
はゝと して、ルオ ロと なり、また ワは その くだりの ウを ちゝと し、  
アを はゝと して ウア ワと なるが ごとし (西周『ことばのいしずゑ』)

これは仮名反切の理論である。漢語音韻学の反切に由来するこの理論は、近世国学派の一派である音義派において大成される。堀秀成は音義派の代表的人物である。音義派は、日本語音が持つ「音」と「意味」の関係を必然のものと捉え、そこに論理を見出そうとする一派であり、彼らの究極の目的は、音図上の個々の音が持つ意味の規定である。意味は音を聞いた時に受けるイメージをもとに決定されるため、その過程において音の精確な理解が不可欠とされる。そのために彼らが利用したのが反切の理論であった。彼らは、音図上で同行のものは反切上字が、同段のものは反切下字が同一となることを認識している。伝統的音韻学では、子音を示す反切上字を「父字」、母音を示す反切下字を「母字」、その 2 字によって帰納された文字を「子字」という。「父」「母」「子」の語を使用し、音図と仮名反切によって音を説明したのが②の記述である。

しかし、本来反切上字は子音を表示するが、「父音」「ちゝのこゑ」であるウ段音は子音ではない。

父音をうつすべき文字なきより、五十音中のウクスツヌフムユル于の十字を借り用ゐたるはよし、されど、そはたゝ文字のみのことにて、その音までも同じきものなりといふにはあらず、なにとなれば、その十字は、全く父母の配合せるものにて、子音なり、父音は、その発声をいふものにして、この十音より、いつれも母韻のウを引き去りたるものなり (落合直文『父音母韻論』1903)

落合の記述は、明治後期になっても、「父音」の語が一般に「ウ段音」と認識されていたことを示すと思われる。この認識をより現代の認識に近づけたのが、音素文字を獲得した



洋学者たちであり、彼らによって③の捉え方が提示される。

#### 4.2. 音図上に現れない音を想定する立場

③は、カ行以下の音を、「文字に現れない音+ア行音」とする立場である。物集の記述を再掲する。

あいうえおの五字は、母韻にて、他の四十五字は、子母韻、または、二母韻の配合なり。  
 (中略) 学理の上にては、音尾の、母韻を除きて、あとに余るをもて、子韻、  
 または、他の、母韻なりといはるゝなり。 (『日本小文典』)

2音の結合によってカ行以下45音の説明をする点では②と共通するが、②とは「子韻<sup>12)</sup>」の用語の指示対象が異なる<sup>13)</sup>。「母韻の五字と、配合韻の四十五字とを合せて、五十音といふ」(『日本小文典』)とあることから、「ア行音=母韻」、「ア行音以外=子韻+母韻=配合韻」であることが分かる。

##### 4.2.1. Medeklinker/Consonantの訳語としての「子音」

大槻文彦は物集の「子韻」の概念に「発声<sup>14)</sup>」の語を当てる。大槻『広日本文典』には「発声ハ、Consonantナリ」(第29節)とある。ヘボン『和英語林集成』のConsonantの項は、初版には記載がなく、再版でShi-in, Kojiとなり、三版でShi-inに統一される。また、大槻の著した辞書『言海』(1889-1891/明治22-24)には、「発声ノ條ヲ見ヨ」という記述ではあるが「子韻」の項目が立てられており、『言海』所収文典「語法指南」には「発声(子韻トモイフモノ)」の表現がある。Consonantに対応するShi-inの語は、明治半ばには定着していたようである。一方で、Vowelに対応するBoinの語が幕末から存在したのに対し、Shi-inの語の登場は明治になってからと言えそうである。

Consonantの概念に「子」の文字を当てたのは洋学者であると思われる。藤林普山『訳鍵』(1810/文化7)には以下の記述がある。

按スルニ。AEIOUYノ六字ハ。単呼定音ヲ倣シ。他音ニ変ゼズ。故ニ之ヲ韻母トシ。  
其余二十字ヲ子字トス。

「其余二十字」は子音字を指す。『英和对訳袖珍辞書』(1862/文久2)にも、Consonantに「子字」の訳語が付されている。

韻字ヲ「キリクレーテル」ト云。又「ホカーレン」トモ称ス。Aeiou 是ナリ。又y字ヲ添テ、六字ノ「ホカーレン」ト云。余ノ十九字ヲ「メテキリクレーテル」ト称ス。又「ストーメ」トモ云。「メデ」トハ連ルハコトナリ。「ホカーレン」ニ連従シテ、「セイーラプ」ヲナスナリ。「ストーメ」トハ瘧子ト云コトナリ。愚按ルニ、此十九字「ホカーレン」ニ従ハザレバ、音韻ヲ如何トモ発スルコト能ハズ。故ニ此称アル

<sup>12)</sup> 本稿では、「子音」「子韻」「子韻」を同一のものとして扱う。

<sup>13)</sup> ③の立場の全てが「子韻」の語をこの意味で使用するわけではない。落合直文は③の立場をとるが、物集の「子韻」に「父音」、「配合韻」に「子音」の語を当てる。

<sup>14)</sup> 「発声」の語は、新井白石『東音譜』(1719/享保4)に見られる。落合直文は「語法摘要」(『ことばの泉』所収文典 1899/明治32)で、Consonantに当たるものを、「わが国声音の発声となるべきもの」と説明し、「父音母韻論」(1903/明治36)で「発声」の語を大槻と同様に使用している。新村出筆録の講義ノート『上田万年 言語学』にもConsonantに対し「発声」の語が付されている。

ナルベシ。

(前野良沢『和蘭訳文略』)

オランダ語で子音を意味する medeklinker は「母音に連なるもの」の意であり、「母音に従わなければ発音できないもの」である。

英語の Consonant については次の記述を見られたい。

Q. Which are Consonants?

A. All the other letters are consonants. And are so called from the Latin con, *together*, sonare, *to sound*, because they can only be sounded together with a vowel. (『英吉利文典』)

『英吉利文典』は大槻文彦「和蘭字典文典の訳述起原(其三)」(1898/明治31)に、「今の洋学家の四十歳以上の人にして此英文典の庇蔭に頼らざりし人はあらざるべし」とあるように、当時において大きな影響力を持った文典である。伝統的音韻学の中で成立した「母音」の語に対し、「母に従うもの」「母がなければ存在できないもの」という意味で、洋学者たちによって採用されたのが「子」の文字だったと思われる。

#### 4.2.2. 音節形成の認識

次に、カ行以下の音を「子音+母音」と捉えることについて考察する。音素文字を獲得し、子音の概念を理解した洋学者たちは、アルファベット表記の五十音図を作成する。例えばカ行は ka ki ku ke ko のように表記される。同行は同子音字、同段は同母音字でそろえられる。

用字ノ法、右二十六字中「ア・エ・イ・オ・ユ・エイ」ノ六韻字ト、「オ・エ」ノ二字ヲ合タル韻ト、共ニ七韻ヲ以テ、余ノ二十字ノ右ニ附列シテ、各韻ニ随テ、其音ヲ成スナリ。此法ヲ「シッラベン」ト云。即反切ノ法ナリ。(前野良沢『和蘭訳筌』)

其連合シテ音韻ヲナスヲ「シルラーベン」ト云フ。其法、支那ノ切韻、印度ノ悉曇ノ義ニ大ニ同ク、小ク異ナル者ナリ。(大槻玄沢『蘭学階梯』)

子音字と母音字の組み合わせによってカ行以下の音を表記する手法を、悉曇学の切継、漢語音韻学の反切に准える。アルファベット表記の音図は洋学者たちに「切韻ノ図」「五十音ノ仮名反切」などと呼ばれ、伝統的音韻学の手法を継承していることが明らかである。大槻玄沢『蘭訳梯航』(1816/文化13)には「字母六ツ字父廿アリテ、父母配シテ音ヲ生ズ」とあり、②で使用されていた「父」「母」の語も見られる。しかし②と根本的に異なるのは「父」の概念である。②が「ウ段音」という「単子音+単母音」でしか「父音」を示せなかったのに対し、洋学者たちは音素文字の獲得によって現代の子音の概念を手に入れたのである。

## 5. おわりに

以上、近世期における母音・子音の概念について見てきた。現在使用されている「母音」の語は悉曇学、「子音」の語は洋学に由来することが明らかとなった。

①②③に共通するのは五十音図を説明原理としていることである。明治以前の音韻学は、五十音図を枠として発達してきた。音義派は反切の原理を音図に適用することで個々の音の精確な理解を試み、その手法を利用して洋学者たちは子音の概念を獲得した。音図に基づいて音を説明しようとするれば、最終的には音図上の個々の仮名の発音を示すことになる。それを目的とした音義派は「父」「母」「子」の術語を考案し、カ行以下45音を2音の結合

として認識した。洋学者たちによって作成されたアルファベット表記の音図も、母音・子音の概念を認識させる目的とともに、仮名がその組み合わせによって説明されることを示している。明治以降、西洋言語学の輸入とともに、Vowel, Consonant, Syllableなどの概念の精確な理解が求められるようになった。洋学者たちは母音字と子音字との結合によってカ行以下の音を示すことを「シッラベン」「シルラーベン」と呼ぶ。「音節」に対応する語である。だが、オランダ語や英語の音節は、五十音図上の仮名で示される「単子音＋単母音」といった単純なものではない。ここに五十音図を説明原理とすることの限界がある。音図に基づいた音韻学は、音図上の仮名の音の説明に主眼を置く。音義派の用語「父音」は、反切を意識する時にのみ使用され、カ行以下45音を意味する「子音」を説明するための概念であることが分かる。一方で、西洋言語学では、VowelとConsonantを同列に置き、Syllableは別次元のものとする<sup>15</sup>。Consonantの訳語に、音義派の「父音」ではなく、洋学の「子音」が採用されたのは、「父音」がウ段音という「単子音＋単母音」を示すという認識が一般化していたとともに、音図と反切に基づいた伝統的音韻学からの脱却を意味する。

音節文字しか持たない日本人に子音と母音の分析的理解を可能にしたのは、音素文字の獲得である。明治以降、音図や反切で音を説明することの限界が露呈し、そこからの脱却が行われたが、伝統的音韻学の蓄積の上に成り立った音声分析があったからこそ、西洋音声学が受容され、それ以降の音韻研究が発達したのである。

#### 使用テキスト

- 新井白石（1719／享保4）『東音譜』（『新井白石全集 第4巻』所収）  
 上田万年講述（1975）『上田万年 言語学』教育出版（1896-1898／明治29-31の講義ノート）  
 大槻玄沢（1783／天明3）『蘭学階梯』（『日本思想大系 64 洋学上』所収）  
 大槻玄沢（1816／文化13）『蘭訳梯航』（『日本思想大系 64 洋学上』所収）  
 大槻文彦訳（1884／明治17）『言語篇』（1985復刻版 青史社）  
 大槻文彦（1889／明治22）『語法指南』（『日本語文法研究書大成』1996 勉誠社）  
 大槻文彦（1889-1891／明治22-24）『言海』（1904縮刷版）  
 大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典・同別記』（1980復刻版 勉誠社）  
 大槻文彦（1898／明治31）「蘭字典文典の訳述起原」（『史学雑誌』9-3, 9-5, 9-6）  
 落合直文（1899／明治32）「語法摘要」（2003復刻版『ことばの泉』所収 大空社）  
 落合直文（1903／明治36）「父音母韻論」（国学院編『国文論纂』大日本図書 所収）  
 賀茂真淵（1769／明和6）『語意考』（松田好夫校訂（1941）『語意・書意』岩波書店）  
 契沖（1695／元禄8）『和字正濫鈔』（『国語学大系 第9巻』所収）  
 浄厳（1682／天和2）『悉曇三密鈔』（天和2年刊本）  
 泰山蔚（1799／寛政11）『音韻断』（国文学研究資料館データベース 学習院大学蔵）

<sup>15</sup> 『英吉利文典』では、Vowel, ConsonantがLesson2で扱われるのに対し、SyllableはLesson3で、Diphthongの概念、単語・文の構成要素などとともに扱われる。W.R.Chambers“Information for the people”（1875）（最終巻『言語篇』を大槻文彦が1884年に翻訳）には、Vowel, Consonantの説明はあるが、Syllableに当たる概念の説明はない。

- チェンバレン (1897/明治30)『日本小文典』文部省  
 鳥海忝 (1816/文化13)『音韻啓蒙』(静嘉堂文庫松井簡治氏旧蔵マイクロフィルム版)  
 中根淑 (1876/明治9)『日本文典』(明治9年刊本)  
 西周 (1870/明治3以前)『ことばのいしずゑ』(『西周全集 第2巻』所収)  
 平田篤胤 (1850/嘉永3)『古史本辞経』(『新修平田篤胤全集 第7巻』所収)  
 藤林普山 (1810/文化7)『訳鍵』(文化7年刊本)  
 古川正男 (1870/明治3)『絵入智慧の環』(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー)  
 堀達之助編 (1862/文久2)『英和对訳袖珍辞書』洋書調所  
 (杉本つとむ編 (1981)『江戸時代翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部 所収)  
 堀秀成 (不明)『音函大全解』(『音義全書』所収)  
 前野良沢 (1785/天明5)『和蘭訳筌』(『日本思想大系 64 洋学上』所収)  
 前野良沢 (不明)『和蘭訳文略』(『日本思想大系 64 洋学上』所収)  
 無相文雄原考 (1834/天保5)『韻学階梯』(静嘉堂文庫松井簡治氏旧蔵マイクロフィルム版)  
 村田春海 (1793/寛政5)『五十音弁誤』(静嘉堂文庫松井簡治氏旧蔵マイクロフィルム版)  
 物集高見 (1888/明治21)『日本小文典』(1997復刻版『ことばのはやし』所収 大空社)  
 文雄 (1773/安永2)『韻鏡指要録』(勉誠社文庫 91)  
 文雄 (1773/安永2)『翻字伐柯篇』(勉誠社文庫 91)  
 J.C.ヘボン (1867, 1872, 1886/慶応3, 明治4, 明治19)『和英語林集成』(2001復刻版)  
 開成所版 (1867/慶応3)『英吉利文典』(杉本つとむ (1985)『日本英語文化資料』八坂書房)

参考文献

- 岩崎克己 (1997)『前野蘭化 1-3』平凡社  
 杉本つとむ (1976-1977)『蘭語学の成立とその展開』早稲田大学出版部  
 高野繁男 (1980)「大槻文彦・訳「言語篇」の訳語」(『人文学研究所報』14 神奈川大学)  
 頼惟勤著 水谷誠編 (1996)『中国古典を読むために』大修館書店